

3) 爬虫類

①概説

国際的にはIUCN、国内的には環境省によってレッドデータブック（RDB）が発行される中で、青森県では2000年3月に「青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック」を発行している。この中の爬虫類分野ではAランクに1種（タカチホヘビ）、Bランクに1種（シロマダラ）、Dランクに2種（クサガメとヒバカリ）の4種を選定している。その後、県内の自然環境変化の進行に伴いレッドデータブックの見直しを行い、2006年3月に「青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト（2006年改訂増補版）－」を発行した。この過程で爬虫類分野も見直しているが変更はなかった。今回の見直しではヒバカリをDランクからBランクに変更することとした。これは県内記録の収集に努めていたが、新しい生息情報が極めて少ないとからランク変更が妥当であると判断したものである。今後も生息情報の収集に努め、注目する必要がある。他の3種のランク変更はなかった。しかし、県内の自然環境変化が各地で指摘されていることから、これからも注意深い観察を続ける必要がある。

本県で記録のあるカメ目には陸産でDランク選定のクサガメの他にイシガメ、アカミミガメ、スッポンがある。さらに、新聞報道（2006年8月22日付け東奥日報紙）によるとカミツキガメのような外来種も散見される。これらはクサガメも含めて自然分布ではなく、愛玩用飼育個体の逸出とみられている。クサガメについて和田（1965）は自然産卵してふ化することもあり、冬期間簡単に越冬していることを認めたと報告している。本県のような寒冷地において野外で交尾、産卵、ふ化、越冬、成長し世代交代を重ねているのか詳細な報告が期待される。また、各地の池沼で甲羅干ししているカメ類を見かけるが、その多くはクサガメである。アカミミガメも観察例が少ないが見られる。スッポンとイシガメの野外での観察事例は少ないので捕獲もしくは写真記録などによる正確な同定に基づく分布情報の集積が必要である。

海産爬虫類として和田（1939, 1965）はウミガメ科にアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの3種、オサガメ科にオサガメの1種、ウミヘビ科にクロガシラウミヘビとセグロウミヘビの2種を記録している。これらは3方を海に囲まれている本県で偶発的な死体漂着か捕獲された事例と考えられる。しかし、多くの場合に新聞報道などで記録されるだけで学術的記録にならないことが多いので、これからも正確な同定と知見集積が必要である。今回の見直しにおいては海産種を評価するだけの資料を収集できなかつたが今後の課題である。

陸産爬虫類ではヤモリ（ニホンヤモリ）の生息情報に注意が必要である。近年出版された図鑑である富田（2007）の分布図には明らかに本県が含まれている。また、大阪市立自然史博物館（1989）による特別展解説書にも本県が含まれている。これらの根拠は山形県立酒田東高等学校生物部の研究によるアンケート調査結果と推察されるが、現在のところ県産標本もしくは同定に使える写真記録などの客観的根拠を探せないでいる。地球温暖化の中で爬虫類以外の生物では南方系の種の本県進出例が報告されており、大量物流が日常的に起きている現代ではこれからの移入と定着が予想される。注目が必要である。

今回の見直しでは減少が懸念されるとまでは評価されなかつたが、トカゲ（ニホントカゲ）は探しても簡単に見つかる状況でなく、分布が局地的であると考えられる。マムシ（ニホンマムシ）も同様で、一般に言われているほど野外で頻繁に遭遇できる種でなくなっている。爬虫類の中でもヘビ類は県民から嫌われることが多いが、生態系構成の重要グループであり、生物多様性維持の対象分野として冷静に見つめ続ける必要がある。

（向山満）

②本文

トカゲ目 ヘビ科

A

和名 タカチホヘビ

環境省：該当なし

学名 *Achalinus spinalis* Peters

[形態的特徴] 全長20~40cmの小型種である。鱗間の皮膚が露出しているなどの原始的な特徴を備えている。幼蛇は暗褐色、成蛇は明るい黄土色になる。背中に黒い縦線が目立つ。

[選定の理由] 本県を北限とする日本固有種で、県内から写真もしくは標本による確実な記録は少ない。既知産地でも連続して見つかる場所は少なく、個体数は少ないと思われる。

[分布と生態の概要] 県内では長い間深浦町十二湖からの記録（秩父, 1950）しかなかったが、最近になって三戸町、白神山地、弘前市、西目屋村、青森市、深浦町から記録されている（向山, 2009）。夜行性で、地中でミミズなどを食べている（富田, 2007）。

[生存に対する脅威と保存対策] 一般に関心を持たれない希少ヘビのために保全対策がないまま生息地改変が進むことが懸念される。目撃記録を含めた既知産地の環境改変のさいには慎重な調査と最大限の配慮をする必要がある。同時に、全県的な生息調査の早期実施と現況把握が欠かせない。

[特記事項] 生息地は暗く、適度に湿った森林内が多いとされる（大野, 1987）。

(向山満)

トカゲ目 ヘビ科

B

和名 ヒバカリ

環境省：該当なし

学名 *Amphiesma vibakari vibakari* (Boie)

[形態的特徴] 全長40~60cmで細身の体型をしている。背面は灰褐色、腹面は薄黄色で、腹板の両端に小さい黒班がある。口角から後頭部にかけて白い模様が斜めに走る（富田, 2007）。

[選定の理由] 日本固有亜種で、本州以南に広く分布するが本県は北限となる。既知産地は少なく、新しい記録はほとんどない。

[分布と生態の概要] 1930年代の南津軽郡と八甲田山の標本が残されている（向山, 2009）が、比較的新しい確実な記録は青森市（笠森, 1987）と深浦町（向山, 2009）に限られる。水田や湿地、池、小川などの水辺で、カエルとその幼生、小魚、ミミズなどを食べている（富田, 2007）。

[生存に対する脅威と保存対策] 一般に関心を持たれない希少ヘビのため、保全対策がないまま生息地改変が進むことが懸念される。目撃記録を含めた既知産地の環境改変のさいには慎重な調査と最大限の配慮をする必要がある。同時に、全県的な生息調査の早期実施と現況把握が欠かせない。

[特記事項] 咬まれるとその日ばかりの命になることが和名の由来だが、無毒でおとなしい。

(向山満)

トカゲ目 ヘビ科

B

和名 シロマダラ

環境省：該当なし

学名 *Dinodon orientale* (Hilgendorf)

[形態的特徴] 全長30~70cm、肉白色の地色に大きな焦げ茶色の斑紋がある。

[選定の理由] 日本固有種で、北海道を含む日本全国に分布しているが、北海道の記録は奥尻島に限られていることから、本県は北限に近いといえる。また、本県における既知産地は少ない。

[分布と生態の概要] 標本もしくは写真等の確実な記録は少なく、八戸市（旧南郷村）、深浦町（旧岩崎村）、西目屋村に限られる（向山, 2002）。目撃記録も少ない。夜行性で人目に触れる機会は少ない。食性はトカゲ類やヘビ類を捕らえて食べる珍しい習性である（富田, 2007）。

[生存に対する脅威と保存対策] 一般に関心を持たれない希少ヘビのために保全対策がないまま生息地改変が進むことが懸念される。目撃記録を含めた既知産地の環境改変のさいには慎重な調査と最大限の配慮をする必要がある。同時に、全県的な生息調査の早期実施と現況把握が欠かせない。

[特記事項] 樹洞における目撃やりんご園に置いてあったマメコバチの巣箱の上から採捕されていることから（奈良, 未発表）、意外と身近なヘビの可能性がある。

(向山満)

爬虫類

和名 クサガメ

学名 *Chinemys reevesii* (Gray)

環境省：該当なし

甲長20cmに達する淡水棲カメで、背甲に3条の縦の隆起があり、甲羅の後縁にギザギザがないことが特徴になる。日本以外に中国大陸にも分布している。

県内でもいくつかの池や川で甲羅干ししている姿が見られるが、元々はペットとしての飼育個体が野生化したものと考えられる。食性は水生動物全般のほか水草なども食べる。県内分布や繁殖に関する情報が少ないので、生息実態調査と現況把握が必要である。

(向山満)

③引用文献

- 向山 満 2002. 青森県西目屋村で拾得されたシロマダラ. 青森自然誌研究, 7: 78.
- 向山 満 2009. 青森県深浦町におけるタカチホヘビとヒバカリの記録. 青森自然誌研究, 14: 75.
- 大野正男 1987. 日本のタカチホヘビ. 日本の生物, 1(10): 48-55.
- 大阪市立自然史博物館 1989. 日本の両生類と爬虫類, 第16回特別展「日本のヘビとカエル大集合」解説書. 87pp.
- 笹森耕二 1987. ヒバカリ. 青森の動物たち. 青森市. p. 12.
- 秩父志行 1950. 青森県のタカチホヘビ. 採集と飼育, 12(7): 211.
- 富田京一 2007. 日本のカメ・トカゲ・ヘビ. 山溪ハンディ図鑑10. 山と渓谷社. 東京. 256pp.
- 和田千蔵 1939. 青森県博物総目録有脊椎動物編. 青森博物研究会会報, 8/9: 1-28.
- 和田千蔵 1965. 青森県の爬虫相. 青森短期大学紀要, 3: 11-19.